

戦勝が生み出した観光

— 日露戦争翌年における満洲修学旅行 —**

高 媛*

Tourism Born out of Victory: The First Japanese School Excursion to Manchuria in 1906

En KO

本稿は、日露戦争の翌年（1906年）に行われた初の満洲修学旅行に焦点を当て、陸軍省・文部省が合同満洲修学旅行を主催した歴史的経緯を、公文史料や教育雑誌及び新聞記事などを通して明らかにするものである。さらに、日露戦争の戦勝の余威のもとで「戦利品」満洲を確認しに行くこの旅行が当時持っていた意義と、その後の満洲修学旅行への影響について考察する。

This study examined the history of the first Japanese School Excursion to Manchuria in 1906, the year after the end of Japanese-Russo War (1904-05). As the victor, the Japanese were deeply disappointed by the contents of the Treaty of Portsmouth signed on 5 September 1905. In order to ameliorate this kind of frustration, Rikugunsho (Ministry of War) and Monbusho (Ministry of Education) held the first school excursion to Manchuria — a pilgrimage to an old battlefield of the Japanese-Russo War in July 1906. 3,694 middle school students and teachers from all over Japan took part in this historical excursion. This study describes this excursion and also investigates the Manchurian experience of participants through the analysis of official documents, newspaper articles and travel reports.

キーワード：満洲，修学旅行，戦跡，教育，メディア

Key words：Manchuria, School excursions, the Old Battlefield, Education, Media

はじめに

1905（明治38）年9月5日、日本側の賠償金要求を棄却した日露講和条約がアメリカのポーツマスで調印された。当日、東京日比谷公園で開かれた講和反対国民大会に参集した民衆は、開会を阻止する警官と衝突し、内務大臣官舎や講和を支持する国民新聞社などを襲い、いわゆる「日比谷焼討事件」まで発展してしまった。

日比谷焼討ち事件の報道で15日間の発禁処分を受けていた『東京朝日新聞社』¹が『大阪朝

日新聞』とともに、早くも翌1906年の夏に「ろせった丸満韓巡遊」と銘打つツアーを実施した²。これは、戦勝したのに賠償金が取れなかったことへの民衆の憤懣と屈辱を、「戦利品」満洲を見に行く興奮と祝祭へと転化するメディア・イベントであった³。

「ろせった丸満韓巡遊」と相前後して、1906（明治39）年7月、文部省と陸軍省の奨励による全国規模の合同満洲修学旅行が実施された。満洲までの船舶や満洲内の移動と宿泊は全部無賃であるため、旅費は、宇品港までの交通費と食費

* グローバル・メディア・スタディーズ学部講師

** 本論文は、東京大学大学院人文社会系研究科へ提出した博士論文（2005年）の一部に加筆し修正を加えたものである。

だけで、自己負担額はおよそ30円。7月15日から29日にかけて、北海道から沖縄まで、各道府県の中学校以上の男子生徒と教職員（小学校教員も含む）延べ3,694名が、陸軍省の用意した御用船に5回に分けて便乗し、3週間に亘る大旅行へ旅立った。満洲修学旅行のさきがけともいべき出来事であった。

本稿は、日露戦争の翌年（1906年）に行われた初の満洲修学旅行に焦点を当て、陸軍省・文部省が合同満洲修学旅行を主催した歴史的経緯を、公文史料や教育雑誌及び新聞記事などを通して明らかにするものである。さらに、日露戦争の戦勝の余威のもとで「戦利品」満洲を確認しに行くこの旅行が当時持っていた意義と、その後の満洲修学旅行への影響について考察する。

1. 発案の経緯

ここでひとまず、日本の修学旅行史における満洲修学旅行の位置づけについて考えておこう。1886（明治19）年2月、東京師範学校（現・筑波大学）が実施した11泊12日の「長途遠足」が、修学旅行の始まりといわれている。これは、初代文部大臣森有礼が進めた「兵式体操」の流れを汲む「行軍」に「学術研究」の機能を合わせ持たせて実施したものである。

そのちょうど10年後の1896（明治29）年に、長崎商業学校（現・市立長崎商業高校）の生徒約20名と引率教師2名が上海への修学旅行を実施し、海外修学旅行の嚆矢となった。ときは日清戦役の翌年（1896）に当り、道中のところどころには戦争が影を落としていた。たとえば、参加した生徒の一人がのちに次のように述懐している。

海外へ行くというので一同勇躍して喜んだものでした。そして明治29年某日、日本郵船神戸丸に一行約20名が乗船して長崎を出発しました。当時の船長は海上保険などの関係でもっぱら英国人を採用せる状態でした。

同船は横浜丸、西京丸と当時優秀の姉妹船で、西京丸は日清戦役に仮装巡洋艦として樺山資紀將軍坐乗のもとに黄海海戦に参加し、敵の水雷艇より至近攻撃を受け、もはや命中と観念せし瞬間、不思議にもその魚雷は船底を通りぬけて無事なるを得た奇蹟がありました。その頃『当たらぬ西京は宝船』という歌まであったくらい有名なものでした。かくして神戸丸は一昼夜半の航海で無事待望の上海へ到着し、日本郵船の埠頭に横づけとなり、一同上陸しました。そしてまず眼につくものはさすがは国際的繁栄の都市で、見馴れぬ高層建物や多種多様な人々、居留地警官の有髯長軀のマドラス人の姿などでした。上海滞在は2、3日で、その間長崎出身牛島某氏の経営せるホテル東和洋行（日清戦争の起因となった韓国の志士親日家の金玉均氏が暗殺せられしところ）にわれわれ一行招待を受けたり東洋鬼トシヤンキの罵声を浴びつつ支那人街や城内などの見物をなし、戦勝の結果利権を得て新設された東華紡績工場の見物やらですごし、別段蘇州、杭州などへ行く計画はないまま同じ神戸丸で長崎へ帰りました⁴。

ほかにも、熊本商業学校（1898年、上海）や、福岡商業学校（1902年、韓国）など、大陸に地理的に近い九州の商業学校が、日清戦争の勝利を契機に、旅程を中国上海、韓国まで延ばしている。

さて、日清戦争終結の翌年（1896）から始まった上海や韓国への修学旅行が、九州という特定の地域と、商業学校という特定の種類の学校だけに限られた経験であったとすれば、その10年後の日露戦争終結の翌年（1906）に実施された「満洲修学旅行」は、国家の奨励により、全国の中等学校以上の学校において、国民的教育行事として行われた初の海外旅行であったといえよう。また1906年夏の満洲修学旅行は、日

本国内の修学旅行や、上海や韓国のような外国への旅行とは異なり、帝国勢力範囲の最前線の現場において「帝国の輪郭」をあまねく確認させる、格別な社会的意味を持つ旅行であった。

そもそも、この前代未聞の大旅行は、いったい誰の発案によって、どのように誕生したのだろうか。『満韓修学旅行記念録』（広島高等師範学校、1907）や『遼東修学旅行記』（東京高等師範学校修学旅行団記録係、1907）など、実際に行った生徒たちの旅行記は散見するが、主催者側である陸軍省と文部省の関連文書は未だに見当たらない。ここでは、その周辺の資料を手掛かりに、実態を探ってみることにする。

日露講和条約締結の3カ月前、1905（明治38）年6月13日発行された博文館の人気雑誌『日露戦争実記』に、軍政事務官として従軍中の国際法学者有賀長雄（1860～1921）による論説「旅順と修学旅行」が掲載された⁵。有賀はこの文章の中で、学生に戦地を見せる意義から、適宜な戦地の選定、具体的な実行方法まで詳しく論じた。まず、戦地視察に恵まれている政治家や実業家とは異なり、少年子弟は感受性が鋭敏である故、同じ郷里出身の将卒の激戦の跡を眼前にすると、「其の脳裏に不磨の印象を銘し、為めに大に興奮して、自ら他日の奉公を誓はずんばあらず」に違いないと語る。「即ち新戦場は此の壮大なる活劇の大舞台にして、此の重要な指物教授の大教場なり。近き将来に於て戦勝帝国の基幹たらんとする少年子弟をして忠君愛国の何たるを知らしむる所以のもの、新戦場に優るの良教場は復有るべからざるなり」。彼はつまり、「新戦場」を、戦勝帝国を支える少年子弟の実物教育の道場として活用すべきだと考えているのである。

そして、数多くの戦跡の中、陸海軍両方の激戦が行なわれ、内地の船舶往來に便利な旅順を「学生の戦場旅行に於て指を第一に屈すべきもの」と勧め、具体的な実行方法として、「成る

べく出征軍人の戦地派遣と同一にし、隊伍を立て、長上を定め、汽船を以て之を輸送して、海上旅行及船内生活の実況に慣れしめ、鹽大澳若しくは柳樹屯より上陸して軍隊上陸の形勢を察せしめ、兵站線路を歩行して大陸行軍の困難を知らしめ、原野に幕営し又或るときは醜穢なる支那家屋に舎営して陣中の不自由の経験せしめんとす、而して先づ旅順附近の地勢より講究を起し、専門将校を煩して攻囲戦当時の実況を聴聴せしむべし」と提案している。

それまで、『読売新聞』の社説では「教育家の旅順観覧／是非とも実行すべし」といったような提案がなされたことはあるが⁶、学生主体の戦場修学旅行の必要性を唱えたのは、恐らく有賀が初めてではなかろうか。「必ずしも戦争の終局を待つ要なく、我軍の軍事行動を妨げざる範囲内に於て、戦時旅行を為さしむるは亦一層の興味あるべきなり」と、有賀は熱く語っている。ちなみに、この文章は、2カ月後に同じ博文館発行の『学生必携修学旅行案内』にも収録された⁷。この一文が当時、どれだけ反響を呼んだかはわからないが、少なくとも、満洲修学旅行の初の提案として、世論に一石を投じたかと思われる。

そして、翌1906（明治39）年の5月、鹿児島第七高等学校造士館（現・鹿児島大学）館長・岩崎行親の奔走が満洲修学旅行の実現に決定的な役割を果たしたといえよう。3月末、すでに館長は生徒たちに、「破天荒の旅行計画談」を披露したという⁸。5月、岩崎は、東京で開かれた高等学校長会議の席上満洲修学旅行について発議したが、突飛だと全く問題にされなかった。翌朝、岩崎は内閣会議に出かける前の寺内正毅陸軍大臣をつかまえ、単刀直入旅行への後援を求めた。

のちに、岩崎は同館創立25年の記念誌に、面会の情景を次のように述懐している。

何か用か、と聞かれたから、生徒をつれて満韓に修学旅行がしたいのです夫故陸軍の御厄介になりたいのです、といつたら校長は旅行などせずと今少ししつかりと生徒の教育をするがよい、僕も教育総監もやつたから教育には全くの門外漢ではない、併し今の教育は駄目である、日々文弱にばかりなつて行く、今の牧野君〔牧野伸顕文部大臣—引用者注〕を誹るのではないが歴代の文部大臣がよくなかつたのであると云つた。私は、御尤です夫だから私は血痕未だ乾かぬ戦地に引張つて行つて鉄鞭教育を施して見たいのです、御承諾なくば職を離れても私で引張つて行かうかと思つて居るのです、と云つたら、岩崎さん、うまいとハタと膝をたゝいて同感を表せられた。

満韓修学旅行の話はその日の閣議で寺内正毅が切り出し、西園寺首相、牧野文部大臣を含む閣僚の間で話題になったという⁹。おそらくこの直後から、陸軍省と文部省が旅行計画の本格的実現に向けて着々と準備を進めていき、6月26日の公表に至ったものと推測される。

造士館館長の回顧は、あくまでも間接的な証言であるとはいえ、そこから「日々文弱にばかりなつて行く」教育の現状に不満を持つ陸軍大臣の心情が、「血痕未だ乾かぬ戦地に引張つて行つて鉄鞭教育を」施そうとする一教育者の提案への共感につながったことは察知できよう。

一方、この計画を陸軍省から持ち出された共催者の文部省の動きを追っていくと、旅行案が公表される2週間前の6月9日に、文部大臣牧野伸顕が、「学生生徒ノ風紀振肅ニ関スル件」訓令第一号を発し、初めて「社会主義」防止に言及した¹⁰。訓令の発布と満洲修学旅行の下準備の時期がほぼ重なっているところから、文部省にとっては、遊惰安逸を求め社会主義思想に走りがちな学生の気風を矯め、健全な余暇の過ごし方を善導し、ひいては国家観念を植え付ける

には、満洲修学旅行ほど時世に適した企画はないと思われたことと推測しうる。現に、教育関係者には、旅行の対象が青年全般ではなく学生とりわけ中等教育以上の学生に指定されたのは、文部大臣の訓示と無関係ではないと受け止められており¹¹、6月29日付『大阪毎日新聞』も、両者を関連づけた社説を掲載している。

「青年子女」の「意気銷沈」と「風紀頹廢」とが文相一片の訓令によりて新に世上の注意を喚起し「風紀振肅」と「元氣復興」との方策について種々の議論の闘はさるゝに至りし際先づ学生をして今夏の夏期休暇を如何に暮さしめんかとは蓋し識者および一般父兄の苦心講究する所なり、此時において陸軍省が一大奮発を以て数隻の汽船に中学程度の学校職員および其生徒の無賃乗船を許し彼等の間に往々希望せらるゝ満韓視察の計画を實際に援助するの挙に出でたるは近頃壮快なる措置にして吾輩は之を一美挙として称讃するに吝ならず¹²。

一方、鹿児島島の教育者に1カ月遅れて、東京府からも声が上がった。6月12日付『読売新聞』には、先ごろ東京府と農商務省の囑託として満洲視察から帰朝した杉原栄三郎が、東京府知事千家尊福に対して、夏期休暇を利用し中学校以上の生徒に満洲修学旅行をさせるべしと建議したところ、積極的な賛同を得、早くも東京府は陸軍省に対し御用船使用などの便宜を計らってもらようよう交渉を始めたと報じられている¹³。実際、陸軍省の便宜供与が報道されてから2日後の6月28日、おおかたの学校がまだその対応に戸惑う状態にあるなかで、すでに7月15日出航予定の第一便の乗船者が第七高等学校造士館と東京府下の諸学校に決定された¹⁴ところからも、造士館と東京府は、提案者であるだけに、ほかよりも早く出発の準備を進めていた可

能性が高いと見られる。

造士館館長と東京府知事の奔走、陸軍省と文部省の推進策に加えて、メディアによる世論作りの役割も見過せない。前にも触れたが、『読売新聞』はすでに1905年1月5日の社説で教育者にも旅順見学の方便を供するようと呼びかけたことがある。1906年6月20日、同紙は再び社説において、「国勢の膨張」に伴う「修学旅行の区域拡張」を実現すべく、当局に、満洲や、韓国、台湾方面に向う生徒への便宜供与を訴えている。

我輩は、各学校生徒が是より相前後して、満韓或は台湾に向つて修学旅行を企つるの挙に出でんことを望むと、もに、我が官憲が彼等に対して能ふ限りの便宜を與へ、各私設鉄道及び各航業者が彼等に対して、無賃若しくは大割引の特典を與へんことを望まざるを得ず、百聞は一見に若かずとは古き言葉ながら、動かすべからざる真理を含めり、修学旅行区域の拡張は国勢の膨張と相伴はざるべからず¹⁵
[傍点は引用者による]

2. 募集から出発まで

1906（明治39）年6月26日に、陸軍省から文部省宛に、今夏中満韓修学旅行団の御用船無賃便乗を許可する旨の通牒があり、4日後の6月30日あたりに、文部省が正式に各地方長官に通達し、さらにその後、各地方役所の教育担当部門が窓口となって、県下の各学校に、希望生徒数や附添職員数などの取調べを求めたと思われる。もともと、第一高等学校、高等商業学校、高等工業学校、東京高等師範学校など文部省直轄の学校の場合は、文部省が6月30日に会合を開き、直接各学校代表者に事情を伝えたという¹⁶。

6月30日付『万朝報』には、陸軍省と文部省の通牒の内容が詳しく報道されている。

陸軍省は本年夏期中陸軍所轄の船舶に便乗を許し得る程度に於て文部省の適当と認めたる中学校以上の学校生徒（監督者を付し団を為すものに限る）にして満韓地方に修学旅行をなすものハ左の各項により取扱ふべき旨関係官衙へ達せられたり但韓国に在てハ京義鐵道を除くの外船舶及び陸行に關し陸軍に於て取扱はず。

- 一・陸軍所轄の船舶及鐵道は旅行者（生徒及監督者の団を云ふ以下同じ）に対し無賃輸送とす
- 一・旅行者に対しては大連棧橋の通過料を免除す
- 一・旅行者の宿舎は陸軍に於て可成便宜を與ふるものとす但し開原以北は此限りにあらず
- 一・満韓に於ける給養は旅行者の自辨とす但し其の調辨に關しては陸軍に於て成るべく便宜を與ふ。船中にありては軍隊輸送の例により糧食を給し旅行者より実費を拂はしむ
- 一・旅行者には寝具を賃與せず
- 一・旅行者にして陸軍所属の营造物を觀覽せんとするものあるときは其の監督者より当該陸軍官憲に申出でしめ其の指揮を受けしむるものとす。
- 一・著名の戰場其の他修学旅行に裨益あるべき事項に關しては勤務に差支なき限り説明の便宜を與ふるものとす
- 一・旅行中入院治療の必要生じたる場合に於て其の監督者より之を陸軍官憲に願出づる時は陸軍所轄の病院に収容することを得但し実費戻入とす。

右に付文部大臣は左の件を通牒したり

- 一・乗船し得る人員及配船は概ね別表の通りとす
- 一・団体の監督は学校の責任ある職員なること
- 一・旅行者の監督に關しては陸軍に於て責を有せざること
- 一・旅行者其の学校の制服を着し一団体の人員は約百名内外とす
- 一・一団は逐次数個の組に分割し各其長を置くこと
- 一・団体には医師を付するを必要とす
- 一・旅行者は各人毛布一枚外套水筒及飯行李等を携帯せしむること
- 一・船舶便乗に關しては必ず文部省を経て陸軍運輸本部に照会のこと
- 一・陸軍の取扱を受くる間は陸軍の法規命令に従ふは勿論軍事上の機密（配兵及軍事上の設備等）を守るべきこと

一・不発弾又は鉄葉製手投弾（罐詰の空罐を利用したるものあり）等を発見したる場合あるも之に手を触るべからざること¹⁷ [下線は引用者]

二つの通牒の内容に示された満洲修学旅行の概要は、以下のポイントにまとめることが出来る。

- (1) 旅行対象者は「中学校以上の学校生徒」かつ附添職員付きの団体に限る。
- (2) 内地から満洲までおよび満洲内の移動は、陸軍所轄の船舶と汽車に無賃便乗し、開原以南の地域の宿泊も、軍の宿舎を無料で利用することができる。自己負担が必要なのは食費だけである。
- (3) 食事の調達や見学箇所案内については、軍が便宜を提供する。
- (4) 旅行中の行動はすべて軍の指示に従うこととする。

ここからも読み取れるように、1906（明治39）年の初の満洲修学旅行は、すべて軍の指導のもとで実施されていたのである。

ところで、修学旅行の企画が発表されるや、たちまち教育関係者や、メディアなどから「学生界の福音」、「一美挙」と好評を博した。自ら附添教員として旅行に参加した開成中学校の堀江秀雄教官は、『読売新聞』に連載した旅行記の冒頭に、満洲旅行は日清戦争終結以来の念願であり、「謂はゆる手の舞ひ足の踏む所を知らぬほど、欣喜の情に堪へぬ」と喜びを語っている¹⁸。

また、「之を大陸の一部而かも帝国の勢力範囲に於ける東亜の地に引率するは其利益其効果して幾何ありとするか」¹⁹とか、「亦豈帝国膨張の機運を善導するの一端ならずとせずや」²⁰といったように、満洲修学旅行を賞賛する声はすべて、これを「帝国の勢力範囲」を認識する「実物教育」として、また「帝国膨張の機運を善導する」方策として、意味づけていることが読みとれるのである。

一方、小学校教員にも同様な便宜を与えてほ

しいという声も、7月7日付『東京朝日新聞』の記事に出た。その理由とは、「之をして躬ら満韓の地を踏み、或は曾て其愛撫せし子弟の戦績を弔はしめ、或は更に現在及び将来の子弟に新興国の新国民たる資格を付與するの必要なる知見を開拓せしむる、亦甚だ有益の事ならずんばならず」ということである²¹。ちなみに、その直後に文部省より通牒があり、小学校教員も満洲修学旅行の一員に加えられた²²。

同じ頃、雑誌『探検世界』は7月5日に、学生の夏期旅行の一助に、内地を始め、台湾、樺太、朝鮮、清国に至る各地の名所旧跡案内を附録として発売した。そのうちの「北清」の部分には、牛荘と大連の二つの港が取り上げられ、前者は「附近に日清日露両役の新戦場に乏しからず、満州の生産品を輸出し又輸入するに重要な港」と、後者は「三十七年戦役の結果我手に帰するや大連と改称せられたり、東清鉄道の起点にして、モスコーに達するに十三昼夜を要す」²³とそれぞれ紹介されている。また、そこには、神戸から大連、旅順までの大阪商船会社の運賃はともに15円であると記されており、これに比べて、陸軍の船舶に無賃便乗できる満洲合同修学旅行の方が費用的にもより魅力的に映っていたと想像できるであろう。

7月に入ると、各地方紙はこぞって地元の「学生満韓旅行」の話題を取り上げ、陸軍省や文部省の通達事項から、満洲視察者の旅行談、各学校の申込状況、県からの旅費補助の情報まで、連日のように紙面を賑わしていた。旅行隊の出発後も、新聞各社は、行程の速報や「満韓紀行」と題する連載など、競い合うかのように盛り上げる一方であった。『読売新聞』や『大阪毎日新聞』、『佐賀新聞』、『海南新聞』、『埼玉新報』、『扶桑新聞』、『信濃毎日新聞』、『鎮西日報』、『琉球新報』などのように、引率教員あるいは参加生徒の通信や旅行記を連載した全国紙や地方紙は枚挙にいとまがない。

これらの報道によると、東京府や大阪府、三重県、和歌山県、新潟県、長崎市、茨城県などの地方自治体は、あいついで、旅行に参加する教員や生徒への補助を表明していたという。補助の対象となるのは、附添教員と師範学校の生徒がほとんどであった。また、広島県の有力者は、満洲は「風土相異の為健康を損するの虞なきを得ざる」ため、「満洲行学生衛生費」の募集を呼びかけている²⁴。出発港宇品までの国内の鉄道運賃については、官線や山陽鉄道も、満洲修学旅行団向けに、5割引サービスを発表した²⁵。

官民挙げての熱い視線のなか、北海道から沖縄まで、申込総数は実に7,616名の多きに達した。そのうち、文部省直轄学校17校と学習院その他の私立専門学校など8校の申込生徒総数は821名、附添職員81名、医師7名の合計909名を数え、それに、各府県の申込者は生徒4,300名、職員701名、小学教員1,650名、医師56名の合計6,707名である²⁶。ちなみに、岩手県にある小学校の女性教員も希望を出したが、「文部省は婦人は許可せざる方針なり」で却下され²⁷、参加者は全員男性ということになった。

これほど大勢の旅行希望者数は、政府側の予想も遙かに超えたらしく、第4回の御用船出発を控えて、文部省は、あわてて、各道府県に「現申込者中より体格其他最相当者を選抜」せよと通達し、最終的に、御用船の便乗を許可する旅行者数を申込総数の2分の1以下の3,694名に抑えた²⁸。すでに旅装を整えた生徒も少なからずいたため、人数制限の知らせは多くの失望者を生み出してしまい、地方紙に選に洩れた生徒の父兄から不満をこぼす投書が寄せられた例もあった²⁹。また、沖縄県立中学校のように、割当定員数を超えたため、「官船の便乗を断然思止まり茲に一行二十余名一隊となり健気にも鶴立独行満韓の地を跋渉する事に決し」³⁰、大連現地地で兵站事務取扱所と交渉し、ほかの修学旅行団体と共に行動するようになったケースもある³¹。

応募数の過剰による定員制限に対する反発から、満洲合同修学旅行のイベントに寄せられた生徒たちの期待の高さがうかがえる。

3,694名の学生と引率教員は、7月15日から5回に分けて宇品港から出航し、3週間の旅行を行った。陸軍省所定のコースは、大連、旅順、奉天、鉄嶺、遼陽、營口、金州、柳樹屯のみとなっているが、団員の一部は許可を得て、安奉鉄道で安東県に出て韓国まで足を延ばしたという³²。

参加者の構成は学校別または地域別に表1～5にまとめてある。100名を越えた学校または地域は、上位から順に、長野県（220名）、広島高等師範学校（140名）、京都府（140名）、大阪商業学校（131名）、兵庫県（121名）、三重県（102名）となっている。各県への割当定員数の不均衡については、旅行後、秋田県の教育者から、「今後は各府県を通して成るべく平等に其の利益を分たしめられんこと教育上の効果を普及せしむるの捷徑なるへしと信す」との希望が出されている³³。

3. 「帝国民」への通過儀礼

3-1 軍人優位の序列

1906（明治39）年夏に実行された未曾有の満洲修学旅行は、さまざまな面で「珍旅行」といえる。大阪高等商業学校の「壁陰生」が、校友会誌に、その模様を次のように描いている。

見よ、旅装の大袈裟、試験中旅行準備の多忙、出立の火急、攸々たる別仕立汽車、宇品波頭の大恐慌、玄海の静穏、大連のパケツ飯、貨車馬車の便乗、驚くべき大建物内の宿泊、奉天の豚責めと遼陽の蠅責め、劇場内の假泊、安奉鉄道粉炭の雨、草河口の夕立、鎮江山上の説教と饗応、韓国の唾旅行、大同江上の船暈、兼二浦の惰眠、下の関の茶話会、九州の無駄旅行、旅費の低廉等数へ来らば何れか皆珍ならざるものぞ。多謝す、日露戦役戦勝の効果

は今や吾人に迄及びて、其新勢力範囲に此珍旅行を試むるを得せしむるに至りたるを³⁴。

[下線は引用者]

以上の描写からもうかがえるように、満洲修学旅行は、普通の旅行以上に「非日常性」に富む「新勢力範囲」の巡礼と感じとられている。

開成中学校旅行隊の携帯品目録には、制服や、制帽、シャツ、靴足袋、手袋、毛布、外套、蝙蝠傘、防蚊具、油紙、雑囊、ゲートル、腹巻、白木綿の袋、水筒、飯行李、手拭、楊子、歯磨、宝丹、ゼム、筆墨、ナイフ、半紙、葉書、切手、手帖、地図、糸、針、蚤取粉、鋏、石鹸、砂防眼鏡、水吞などが掲載されている³⁵。学習院の旅行隊の一人は、「新橋に集る学生引きも切らず皆水筒雑囊飯盒雨具等を七ツ道具の如く背ひ込みし様出征軍人に似て勇ましき事限なし然れども彼は満洲の野に死せんとして行き我は生きんとして今満洲の空に赴くなり」と、学生の姿と出征軍人に重ね合わせ、戦地に向う覚悟で旅立ったと述懐している³⁶。

このような大袈裟な旅装と緊張した心構えで旅行に臨む理由は、一つには、満洲にはいろいろと珍しい猛獣毒蛇が棲息し、危険な伝染病が流行し、「土人は頗る不潔なれば、衛生上には甚だ宜しからず」³⁷などと伝えられていたからである。

満洲修学旅行の実行に当たっては、当局側は、当初から「衛生管理」に神経を使っていた。団体には医師の附添が必要とされ、参加者全員は旅立つ前に「体格検査」を受け、軍医による「衛生上の講話」を聴いたりしていた。また、旅行中、宿泊した兵站部より「土人販売の飲食物品を室内に持込み飲食するを禁ず」³⁸、「外出中は、不潔なる土人の家屋に立入るを避くべし」³⁸などと警告され、金州兵站で軍医による健康診断をもう一度受診し、病気にかかった者は陸軍病院で治療を受けた。それでも、3,694名のうち、姫路中

学校生徒を含む数名の病死者が出たという。

「出征軍人」のごとき旅装を身に纏い、厳しい健康管理を受けたことのほかに、旅行のすべてが軍隊に仕切られていることも、満洲旅行に規律・訓練的な意味合を強く持たせていたのである。奈良県畝傍中学校長の宗像逸郎は、附添教員の立場から次のように述べている。

此の旅行は学校職員生徒に軍隊生活の一部を実験せしめたり。今回の旅行は主として陸軍官憲の指揮命令を受け、陸軍の兵舎に宿泊し陸軍々人の手に成れる糧食を給せられ、言はゞ陸軍出征軍人に似たる生活を為したるものなれば。軍人的規律と軍人的生活とを一部分学びたるものなり。四千人の者に一種の軍事教育を興へたる永遠の効果は又注意すべき價あるものなり³⁹。

このような、「陸軍官憲の指揮命令」のもとで実施された修学旅行は、当然の如く、帝国軍人の優位性を認識させ、軍人→教師→学生の序列を体感させたのである。

たとえば、御用船内では、軍隊における階級序列と同じく、身分の高下によって客室や食事などの待遇に差が付けられている⁴⁰。乗船して間もなく、「『司令部の命令であるから学生諸君と、その他の三等室の待遇を受けて居る者は上甲板から退去し給へ』と知らせられ、「学生連中は互に顔見合はせて吃驚の態度をあらはし、中には不平を鳴らす類もあつたが、『軍隊の官憲に対し不平を鳴らした處で、何の効力もないよ、それが否なら船を下りて後へかへるがよい』と言はれたので、悄然として甲板を下りて行くのは、大に気の毒であつた」と傍に見ていた開成中学校の先生がこう述懐した⁴¹。また、上陸後、食事の当番をした奈良女子師範学校の教頭が、敬礼の仕方が悪かったせいで軍曹に叱られ御飯をもらうことが遅れたという事件もあった⁴²。

『福岡日日新聞』なども、「満韓旅行の学生隊、無作法不行儀で、軍人の軽蔑を受け、不平満々との噂さがある。注意す可し」と報道した⁴³。また、旅行後、文部省を通して各学校長に送られた、「文部次官ヨリ学校職員生徒満韓旅行ノ際ニ於ケル行動ニ関シ陸軍部内ノ視察報告内覧ノ件」にも、引率教員の「礼儀ヲ缺ク」ことや、学生の「不規律」と衛生観念の欠如について厳しく批判した⁴⁴。そのなかで、特に興味深いのは、次の二つの指摘である。

- 一・某学生団航海中頗ル不秩序不規律ヲ極ム職員等之レヲ制御ス能ハス漸クシテ職員ノ会議ヲ開キ議論百出底止スル處ナシ学生傍聴シテ傲然職員ノ良否ヲ批評ス職員間秩序ナク学生ニ服従ナシ偶々富塚少佐（嘗テ中央幼年学校中隊長奉職）同船ス見ルニ忍ヒス職員等ヲ論シテ其方法ヲ授ク船中稍ヤ静粛ナルヲ得タリト
- 二・某船中海軍少佐アリ食卓ノ首座トス職員屢々之ヲレ犯ス事務長懇ニ論ス所アルモ食毎ニ必ス之ヲ奪フ其礼節ニ慣ハサル概ネ如スト云フ

このような監督職員と学生の秩序の転倒や、職員による軍人上位秩序への侵犯は、軍人の介入によって終息し、軍人優位の権力「構造」は旅行前より一層強化されることになったわけである。これは、たとえば、次の紀行文に綴られた、軍人に対する感謝に満ちた言葉からもうかがうことができよう。

其巡遊中に於て、宿するとして、軍人の恩を蒙らざるなく、忠勇なる帝国の軍人、我帝国の花は、我等の爲め、飯を焼き寝具を供す。炎熱燬くが如き満洲の気候と戦ひながら、激しき軍務を終へて、又た吾人学生の為に寝食の用を致す。嗚呼、吾等国民は何によりてか軍人の恩に報ひんとはする⁴⁵。

3-2 戦跡と慰霊

陸軍省・文部省共催の満洲修学旅行の狙いは、どこにあったのか。同行教員の一人は、旅行1ヶ月前発布された「学生生徒ノ風紀振肅ニ関スル件」の文部省訓令を連想し、その目的は、利源調査でも身体鍛錬でもなく、「精神上の感化」、「愛国心を刺戟する活きたる感化」にあると推測している⁴⁶。それを裏付けるように、今回の旅行コースには戦跡が多く組み入れていた。

甲班に属する東京府立第三中学校の記録によると、まず、満洲に向う御用船の甲板上より、1年前の5月27日、連合艦隊がバルチック艦隊を完全撃破した日本海海戦の舞台である対馬海峡と沖の島を望み、陸軍少将より満洲の地理や物産、戦況などについての講話が行なわれた。そして、満洲上陸後、一行は、大連—旅順—奉天—鉄嶺—遼陽—營口—金州—柳樹屯—大連のコースを辿るが、戦跡関係として、旅順陸戦の要塞跡および閉塞船が撃沈された旅順港口、奉天大会戦とその追撃戦の跡・奉天城外と鉄嶺、遼陽会戦の跡・首山堡、南山戦の跡・南山及び和尚島の諸戦場を実地見学した。ほかに、旅順の「戦役記念品陳列場」を見学し、遼陽の招魂社を参拝し、金州にある南山戦役の鎮魂碑前で一同「整列して脱帽敬礼」した。柳樹屯には、日清戦争当時の清国砲臺の遺址と、日露戦役の際のロシア軍兵營の跡も残っていた。旅順、鉄嶺、遼陽、金州、柳樹屯の5箇所で、陸軍将校による戦況についての講話が行なわれたという⁴⁷。

具体的な場面として、たとえば、乙班を乗せた船が、沖の島附近に近づくころ、ある教授の奔走により、軍の命令で学生に出入り禁止だった「上甲板」に、職員生徒らは一同集合した。

是に於て校長の発声にて『大日本帝国万歳』を三唱し衆皆之に和す。轟然たる音響は今迄の沈黙を破りて海心にひびき波乱躍り海若潜むの観あり。終りて『君が代』を歌ふこと二回。

衆肅然として襟を正しうす。此間船は進行を止めて其場に於て徐に一回転をなせり。かゝる折の儀式なりときくも珍し⁴⁸。〔傍点は原文のまま〕

沖の島という、日露戦勝を決定的にした名高い海戦の舞台で、「大日本帝国万歳」三唱や「君が代」斉唱などの儀式を経験することによって、生徒・教員・軍人の三者は、肩書、等級にこだわらぬ、平等な「戦勝国民」としての実感を分かち合い、帝国膨張の誇らしい歴史を共有することが出来たのである。

また、同じく乙班の中に、遼陽会戦の戦死者の遺族と出身校の生徒が入っていた関係で、遼陽招魂社においては、軍人・教員・生徒の三者を含む慰霊祭が特別に行なわれた。

遼陽兵站司令部某副官来り祭壇を設けられ野に生ひし桔梗撫子の供花も美し我校〔筆者注：大阪府立北野中学校〕出身者故牧田大尉を弔はんと其の実兄なる四條暁〔筆者注：大阪府立四條暁中学校〕教頭牧田先生祭主となられ式を挙げらる。／栗毛の馬に青貝を鏤めたる鞍をきて手綱ゆたかに乗り来たりし本願寺某僧の読経あり次に祭主の焼香あり山村先生は我校教員を代表して余は生徒総代表として相継きて焼香し最後に四條暁の教員にて本校卒業なる馬淵君及同校生徒某君の焼香ありて厳かに式終る⁴⁹。

戦死者を弔う儀式では、軍人・教員・学生は、もはや指導／指導されるという序列と関係なく、死者の戦友、教師、親族あるいは後輩として、ひいては死者が命を捧げた帝国の一国民として、戦死者の記憶を分かち合うことができたのである。

3-3 「他者」の選別と排除

旅行は「他者」に出会う過程でもある。戦勝直後の満洲旅行は、とりわけ、帝国の自画像と複雑に絡み合ういくつもの「他者」と出会う旅でもあった。

奉天の旧都を訪ふては隣邦老大国の末路の哀れなるに泣き、到る處に意気頹廢、私慾是れ追求するの亡国の民に嘔吐を催し、到る處に我帝国の勢力の發展大なるを歎び、又露人経営の跡と我が経営と比較して我國民の小なるを憾み、且つ無頼漢の暴状と醜業婦の痴態との為め、正義の戦をなし、幾萬の生靈と巨大の費を犠牲にして得たる土地を汚さるゝを嘆じ⁵⁰〔下線は引用者〕

秋田県師範学校の生徒による短い一節の中に、「隣国老大国」の「亡国の民」である中国人、ロシア人の置土産を経営する能力もない満日本人、とりわけ「無頼漢」と「醜業婦」の姿が登場している。

3-3-1 内なる「他者」としての「醜業婦」

1905（明治38）年1月4日、陸軍省告示第一号『大連湾出入船舶及渡航商人規則』が発布され、陸軍大臣の営業許可を得て大連に渡航した1,600人のうち、営業主は200人、使用人は男1,260人、女140人であった。この年の9月、日露戦争の終結とともに大連渡航が自由になり、1906年末の時点で、大連在住の日本人男性は5,263名、女2,985名までに急増した⁵¹。1905年初頭から1906年末までの2年間で、日本人男性は3.6倍に増えたのに対して、女性の方の増加率はなんと21倍以上であった。

急増した日本人女性の多くは「醜業婦」といわれた売春婦である。大江志乃夫氏によれば、日露戦争終結時の1905年9月現在、関東州（大連、旅順、金州を含む）の日本人芸娼妓数は1,403

名を数え、これは在留日本人2,582名中の54.3パーセントにあたるという⁵²。さらに、この年の12月に、関東都督府によって大連西南の山麓が遊郭地「逢坂町」と指定され、同時に貸座敷規則も公布され、大連における公娼制度が始まったのである⁵³。

満洲修学旅行生の中には、戦死した「英霊」への感激や軍人に対する感謝とは対照的に、同じく日本人である「醜業婦」に対しては、厳しい視線を投げかける者が多かった。たとえば、広島高等師範学校英語部の生徒は、次のように綴っている。

吾人は満洲至る所に国力の発展を認識せざるなし。今吾人が満洲旅行によりて感得したる我戦勝軍隊の労苦に対する感謝の念と国威自覚の心とは長く記念に存すべし然れ共之に伴ふて吾人の杞憂に堪へざらしむるものは我醜業婦と冒険的商人との多きと是なり。[中略]醜業婦に至りては無懶漢の好餌となりたるは頗る憫むべきも其国辱たるや疑ふべからず⁵⁴。

「国力の発展」、「国威自覚」、「国辱」といったナショナルな語りの続出からも読み取れるように、「国家」への貢献度というナショナルな価値基準にこだわる生徒の視線は、「醜業婦」を内なる「他者」として容赦なく選別し、疎外する。と同時に、生徒たちは自ら「帝国民の理想像」への自己同定、自己承認を図ろうとしたのである。

このような内なる「他者」への抑圧的な語りには、しばしば外なる「他者」への差別的な視線と絡みあって作用する場合がある。たとえば、長崎県玖島学館教諭である横山純一は、『鎮西日報』に連載する紀行文のなかで、「支那人の如きも已に日本婦人を軽蔑いたす念慮を有し居候由には日本婦人は悉く醜業婦なりとの感念を有し居候」、「支那人すら既に軽侮の念を以て日

本人を見る如何ぞ新日本の領土に於て清人を信服せしめ将来の発展を期し遠大の計画を望む可けんや」⁵⁵と、現地民に誇示すべき「戦勝の威信」を「醜業婦」によって汚されてしまったことを慨嘆する。横山の文章の中には、軍人／醜業婦、男／女、日本人／支那人という幾重もの差別構造が絡みあっていることが確認できる。

3-3-2 「他者」としての「支那人」

「戦勝の余威」を借りて満洲を旅行できた修学旅行生たちは、「他者」としての「支那人」に出会うと、「帝国の威厳」を誇示したくなる。福岡医科大学の学生小出鈔が、奉天にある清国人経営の料理店に入り、筆談を試みたところ、

支那人が余等の姓名を問ふたから余は早速筆を取つて大山光と書いた他の友人も亦可笑さをこらへながら黒木寛だとか乃木義輝、奥大勝等出鱈目の姓名を書いて悠々然としてすまして居た支那人は之を見て何か驚いた様に盛に支那人同志で話をして居たが遂に筆を取て余に向ひ大人は如何なる人かと書いたから「我日本大学堂学生為視学来此地」と極めて不完全な漢文を書いてやつたら頗りに明白々と云ひ又頻りに支那人同志で大将と云ふ事を話して居たから奴さん大山光の名に驚いて大山大将の一族とでも思つたかも知れない⁵⁶。

このように、いたずら半分には、大山巖満洲軍総司令官、黒木為禎大将、乃木希典大将、奥保鞏大将など、日本軍の指揮官たちを連想させる名前を偽った修学旅行生は、現地人の前で、自ら「戦勝国民」としてパフォーマンスし、ささやかな征服感を満喫したのであろう。

このような戦勝心理のもとで、修学旅行生の多くは、現地の清国人を描写する際、「亡国の民」という表現をよく用いている。たとえば、東京府第一中学校の4年生牧田寅之助は、満洲の第

一印象として、大連埠頭に上陸直前に目にした「支那苦力」について次のように述べている。「彼等の監督者は、始終一本の鞭を持つて働かないものをば打つのである。又我等大勢のものが、異様な風体をして、甲板上から見下して居るので、彼等も亦船へ近寄つて来る。すると象の如き臭気がした。其れで、彼等を退けるのに、石を抛げて追ひ拂ふのである。日本人ですら、彼等を取りあつかうのに、こんな様であるから、露西亞人等は、彼等を何と見て居つたらう。犬か猫でも取りあつかうやうであつたらう。嗚呼。亡国の民とは実にかゝるものかなと、熟々感じたのである」⁵⁷。

このような、われわれ「戦勝国民」／かれら「亡国の民」という思考回路は、自然に、次の2点についての正当化を導くことになる。

一つ目は、現地で目にした日本軍人の跋扈ぶりと、それを支える帝国の権力構造の正当化である。これは、たとえば「只見る一団又一団之でも人間かと思はれるまでに片穢じみたる支那苦力が大連阜頭に群集して牛馬の如く軍夫の指揮に動くを見ては又一種奇態の感を起した」⁵⁸とか、「兵士は土人の頭髪を物干し柱に引つ掛けて引き上げ、一足は愚か一寸でも動かれざるようにして、手頃の棒にて打ち懲らせり併しながら彼豚尾漢其の位の事には平氣にて、さのみ苦痛を感じざるものゝ如し。／其のづ太き加減には、実に馬を敬するばかりなりき」⁵⁹とかいったように、同情の気持ちなど微塵も感じさせない好奇的な語り口からも読み取ることができる。

にもかかわらず、「他者」との出会いには、帝国のまなごしをためらわせる契機も潜んでいた。たとえば、東京高等師範学校の学生が残した貴重な文章がある。

雨あがりの道のこね返したような中に僅か足を入れるだけの乾いたところが一筋出来て

るので、それを僕は辿つた。所が途中で一人の騎兵に出あつた。彼避くるか我避くるかとなると勿論こちらは道の悪いところを徒歩だから向ふが丁寧に避けてくれたのはいゝが此論理は不幸にして僕に続いて来た支那人には応用されなかつた。騎兵はいゝ道を行く、支那人は小綺麗な木靴のまゝで泥濘の中を通らざるをえない。／これは一寸したことだけれど、亡国の民が如何に優勝国民に取扱はれてゐるかは是でも察せられる。聞くところによると或日本兵は支那人の民家に押入つて鶏や豚を無暗に徴発するとか、それで支那人は兵士の影を見ると直ぐ戸を閉てる、それを其兵士は得意にするさうだ。又或駅で直接見たのには日本兵が支那人の辮髪を握んで引きずる、支那人は泣き叫ぶ、兵士は蹴る。なぐる。暫くして赦してやつたやうだ。／豚の如き支那人を治めるのには是でなければいけないのかも知れぬが、なるべくならば「豚」としてよりも「人」として取扱ひたいものだとの底に思つた⁶⁰。

ここからは、「優勝国民」としての居心地よさに満足しながらも、「支那人」を「豚」同然に扱う同胞への同一化をためらう、まなごしの揺らぎを読み取ることができる。この生徒は「亡国の民」を「豚の如き」ものとして治める「正当さ」を全面的に否定してはいないが、「なるべくならば『豚』としてよりも『人』として取扱ひたいものだ」と、一瞬、帝国のまなごしへの懐疑と自省の気持ちを吐露した。

しかし、満洲修学旅行自体が「戦勝の余威」の下で実現されたものである以上、ほとんどの旅行者はこのような「疑い」にさえ至らず、「亡国の民」と嘆ずるぐらいで、帝国の支配構造を是認してしまったのである。

それに、清国人を「亡国の民」とみなす発想を涵養するもう一つの効用は、国家観念の大切

さを自発的に認識させるところにあった。第一高等学校の生徒が、清朝発祥の地・奉天にある北陵の前に、「嗚呼宗廟の屋上、草を生ひしむる朝廷と、国祖の廟前に午睡せる国民とは我等に亡国の意義を教へて覚へず寒心に堪へざらしむ、当世の某々主義者を掲げ来りて斯の民と斯の土を見しめざりしは吾人の深く恨事とする所也」と、自ら「亡国の民となること勿れ」の意識を強化させたのもこの一例ではなからうか⁶¹。

前述した東京府第一中学校牧田の同級生で琉球国最後の王・尚泰（1841～1901年）の孫に当たる尚且も、この旅行に参加している。1879年、明治政府による「琉球処分」により、尚泰一族は華族として東京への移住を命じられ、首里城を明け渡すことになった。40年ほど前に「亡国の民」として故郷を追われた琉球王朝の末裔は、どのような目で、かつて朝貢体制によって従属していた清国を見ているのだろうか。

「清人の卑屈なる状は、かねてよりきけり。実際に見るに及びて、殊にこれを感じ」と、尚且はまず述べたあと、同級生と同じく、大連港で「さながら獣に対する如く」苦力を鞭打つ日本兵と、「怒ることもなく、恥づることもなく、逃げて又直に集る」苦力の「卑屈」な姿を描いた。そして、「彼等の仲間にては、屢互に争ふを見るも、一度日本人の前に出づれば、唯々として従僕の如し、げに哀なるは亡国の民なる哉。支那人の辱めらるる事、かくの如きも、我国人の側より言へば全く当然の事なり」とこれを正当化し、「彼等の手癖のあしき事」や「其衣服は、雑巾の如く汚れ」ていたことなど、「万事に清潔なる我国人の、これを卑しむるは、無理ならぬ事なり」と随所に、「彼等」「支那人」と「日本人」「我国人」との対比を行なっている。続いて、「清人の無教育」と、「政府の従来は無能」による「風儀の墮落」を挙げ、最後に、「馬賊横行」の政治状態を評して「無政府の有様、言語同断と云ふべし。あゝ。其宮殿は荒れ、其

宗廟は壊れ、其法は立たず、其民は辱しめらる。これらの様をみれば、誠に人をして此土既に朝廷なきかを嘆ぜしむ⁶²と締め括った。

学友会雑誌に掲載するこの文章に、どれだけ本音を書けたのかはわからないが、「かねてより清人の卑屈」を耳にしていた尚且は、ほかの同級生と同様に、清国人を見下す視線を共有しているといえる。自らも「亡国」の烙印を背負う琉球王朝の末裔であるだけに、清国人を「亡国の民」と表現するのに躊躇もあったのではないかと想像されるが、一方、執拗なまでに彼らの亡国ぶりを表現すること自体、（彼らと異なる）自らの亡国民としての烙印を払拭し、「日本人」の視線に近づき、「日本人」としてのアイデンティティに同化しようとする強い欲求の現れとも読み取れる。

このように、「亡国の民」を展示する満洲修学旅行は、多くの学生生徒に、帝国民としての視線を植え付け、帝国民としての自覚を深めることができた。それと同時に、帝国の新参者である沖縄人の生徒にも、帝国民のまなざしへの自己同化を促すことができたのである。

4. 旅行の衝撃波

満洲修学旅行の嚆矢ともいえる1906（明治39）年夏の旅行は、参加者3,694人という前代未聞の大旅行であっただけに、教育界に与える影響も大きいものであった。

まず、教育現場において、これまで「皆言語文字絵画によりて満韓地理歴史を理解し、之を教授し又学習」していた教師たちは、旅行を通して「地理歴史上既有の知識を確実にし、并に将来の研究に正確なる基礎を與へ、且つ新聞雑誌に表はれたる満韓の記事を興味を以て閲読する」⁶³に至ったのである。

また、各学校は満洲の「参考図書」や「博物標本」「地理歴史標本」といった教材や実物を積極的に収集してきた。たとえば、東京府立第

三中学校は、大連民政署や各地の兵站業務取扱所から贈られた参考図書14部、石灰岩などの博物標本41点、「土人名刺」、「支那服」などの地理歴史標本185点を持ち帰った⁶⁴。北海道師範学校は、1906(明治39)年9月17日から3日間に亘って開かれた創立20周年記念の「教育品展覧会」に、旅行生が持帰った「遼陽師範学堂小学部成績品及満韓旅行土産等」を参考品として出品した。展覧会の会期はちょうど北海道物産共進会の開催期間と重なっていたため、地方の小学校も含めて見学者数は数千名にも達したという⁶⁵。下関商業学校は帰国後、学校内で生徒と一般市民向けに満韓視察の講演会を開いたという⁶⁶。

さらに、旅行者の見聞は学校内にとどまらず、新聞を通して広く社会一般に伝えられるようになったのである。

満洲修学旅行がまだ実施されている最中の1906(明治39)年8月15日、仁川にある朝鮮日日新聞社が、『読売新聞』や『埼玉新報』に広告を掲載し、15歳以上の男子学生と教師を対象に満韓旅行団を募集した。費用50円、定員100名で、軍人と学者数名が随行講師として各地で講話を行うとのことである。

翌1907(明治40)年5月、文部省は早くも前年と同じ規模の夏期「満韓修学旅行」を募集し始めた。ただし、前年9月を境に、関東州が軍政から民政に切り替わったため、1906年11月に設立された南満洲鉄道株式会社(略称・満鉄)を利用する乗車賃や宿泊費などで、1907(明治40)年の旅行の出費は前年より一人当たりおよそ40円が増えることとなった。その結果、申込を取りやめた学生も多く、最終的には参加者は261名となった⁶⁷。

文部省や新聞社主催の旅行とは別に、学生の「無銭旅行」もこの頃から満洲に旅程を延ばすようになった。たとえば、「横川吸虫」の発見者として有名な寄生虫学者・横川定は1907年

7月、岡山医学専門学校在学中の最後の夏休みに、「夫々の領域に青年学生の無銭旅行が各地で催されて居たので、これに煽られて吾等も朝鮮満洲地方に旅行して見聞を広めたいと考え」、仲間と二人で満韓無銭旅行に出かけた。満洲では兵舎や軍の指定旅館に泊まったり、軍の御用船に便乗したりして、帰ってから校友会で旅行談を披露したとのことである⁶⁸。

1912(明治45)年7月、文部省普通・専門・実業学務三局の通牒「満鮮地方修学旅行ニ関スル件」が発せられた。「従来夏季休業等ヲ利用シ中等程度諸学校職員生徒ヲシテ満鮮地方ニ修学旅行ヲナサシメ同地方ニ於ケル学術上ノ研究ヲナサシムルト同時ニ日露ノ戦蹟等ヲ視察セシムル向キ有之右ハ学術上ノ効果ハ勿論拓地植民ノ思想ヲ喚起シ忠君愛国ノ念ヲ涵養スル等教育上裨益不尠儀ト存候」と、従来の満鮮修学旅行の意味を高く評価し、朝鮮総督府や満鉄に汽車賃や宿泊料などの割引を提供してもらうことになったとの内容であった⁶⁹。この年の夏、鹿児島商業学校や、京都第一商業学校、第一高等学校などの生徒も学校単位であいついで満洲を訪れた⁷⁰。

このように、1906(明治39)年夏に行なわれた、陸軍省と文部省主催の満洲合同修学旅行を火付け役に、学生生徒を対象とする新聞社や各学校主催の旅行、および生徒自身の「無銭旅行」は、「満洲」を目的地として視野に入れるようになった。

まとめ

1906(明治39)年7月から8月にかけては、満洲における日本の支配の軍政から民政への切り替え直前であり、南満洲鉄道旅行会社や本格的な旅行会社もまだ設立されていない時期にあたる。しかし、観光環境も充分整備されていないなかで、なぜ満洲修学旅行が敢行されたのか、ここで、内的欲求と外的条件の二つの側面から検討する。

内的欲求としては、次のことが指摘できるであろう。日露戦勝から1年、日比谷焼き討ち事件や学生の「風紀頹廃」に象徴されるように、講和への鬱憤と国家観念の低落が社会現象として存在していた。そこで、戦勝したのに賠償金が取れなかったことへの民衆の憤懣と屈辱を吸い上げてそらすイベントの一つとして、陸軍省・文部省主催の合同満洲修学旅行が行われたのではなかったか。

一方、外的条件として考えるのは、陸軍省・文部省主導のもとで、メディア、教育家などさまざまな方面からの協力が揃ったことである。このゆえにこそ、満洲修学旅行はスムーズに実行できたのである。とりわけ、すべてのことにおいて特別な便宜を供与する陸軍省の役割は大きいものであった。これに引き換え、翌1907（明治40）年の夏は、文部省が同じく満洲修学旅行を企画したが、この年の4月に開業した満鉄が8割の大サービスを行なったにもかかわらず、乗車賃や宿泊費などで、前年の軍政期より、一人当たりおよそ40円の出費が増えることになった。その結果、申込を取りやめた学生も多く、予定の3,500人を大幅に下回り、1割未満の261名となった⁷¹。

日露戦争翌年（1906年）の初の満洲修学旅行は、教育者層、学生層に広く戦勝の恩恵を享受させ、戦跡めぐりと慰霊活動、日本人売春婦や現地「支那人」との接触などを通して、自ら「皇恩の有り難さ」⁷²を感じる自律的な「帝国民」を作り上げたのであるともいえるだろう。まさに、戦勝が生み出した帝国民への「通過儀礼」だったのである。

表1 甲班：琴平丸 7月15～8月9日

学校名		生徒数	教職員数	小 計
第七高等学校造士館		62	5	67
東京府立諸学校	師範学校	67	5	72
	第一中学	40	9	49
	第二中学	34	6	40
	第三中学	45	17	62
	第四中学	30	7	37
	織染学校	18	4	22
	女子師範学校 第一高女 第二高女 第三高女 職工学校	0	12	12
小 計		234	60	294
東京高等師範学校		168	24	192
合 計				553

出典：1906年7月16日『大阪毎日新聞』；東京府立第二中学校長「復命書」（東京都公文書館蔵）；東京高等師範学校修学旅行団記録係「遼東修学旅行記」，1907年；1906年7月12日『読売新聞』

表2 乙班：雛丸 7月19日～8月12日

学校名	生徒数	教職員数	小計	
広島高等師範学校	118	22	140	
東京帝国大学	—	—	—	
第一高等学校	26	3	29	
第二高等学校	—	—	—	
学習院	14	1	15	
東京美術学校	—	—	—	
東京外国語学校	—	—	—	
大阪府下諸学校	大阪高等商業学校	66	4	70
	大阪商業学校	125	6	131
	大阪府立高等医学校	6	2	8
	大阪高等工業学校	—	—	—
	農学校	19	3	22
	師範学校	12	2	14
	北野中学	20	2	22
	岸和田中学	6	3	9
	堺中学	8	4	12
	八尾中学	—	—	19
	市岡中学	19	2	21
	富田林中学	7	1	8
	四條畷中学	10	4	14
	桃山中学	16	4	20
	天王寺中学	10	6	16
	明星商業学校	7	1	8
	囀託医師	0	2	2
新潟師範学校	—	—	5	
合計	705			

注：—印の付いているのは、不明である。
 出典：『満韓修学旅行記念録』、広島高等師範学校、1907年；
 1906年7月10日『大阪朝日新聞』；『越佐教育雑誌』第166号、
 1906年12月10日、p.38

表3 丙班：神宮丸 7月22日～8月16日

府県又は学校名			人数	
京都府	学校名	人数	140	
	京都市小学校教員	24		
	各郡小学校教員	18		
	府立師範学校	13		
	府立第一中学校	30		
	府立第二中学校	12		
	府立第三中学校	2		
	府立第四中学校	4		
	市立商業学校	30		
	市立染織学校	4		
	市立美術工芸学校	7		
	私立古義真言宗職台高等学校	2		
	合計	140		
第三高等学校			22	
和歌山県			50	
石川県			60	
富山県			53	
東京高等商業学校			18	
神戸高等商業学校			49	
私立大倉商業学校			16	
台湾協会専門学校			13	
慶応義塾			84	
早稲田大学			46	
開成中学校			25	
成城学校			7	
麻布獣医学校			21	
広島県	学校名	生徒数	97	
	師範学校	4		1
	県立広島中学校	15		2
	県立福山中学校	3		2
	県立忠海中学校	19		6
	県立広島商業学校	2		1
	県立尾道商業学校	9		1
	私立明道中学校	6		1
	私立日彰館中学校	3		1
	私立修道中学校	1		1
	広島高等女学校	0		1
	職工学校	0		1
	小学校	0		17
小計	62	35		
滋賀県	学校名	人数		
	師範学校	25		
	第一中学校	5		
	第二中学校	14		
	商業学校	5		
	農学校	12		
	小学校教員	9		
付添医師	1			
岡山県			89	
合計			861	

出典：1906年7月19日『京都日出新聞』；1906年7月17日『都新聞』；川上卯治郎編『八幡商業五十五年史』、滋賀縣立八幡商業学校創立五十周年記念会、1941年、p.382；『岡山県教育会誌』第75号、1906年7月30日；『校友会雑誌』第42号、東京開成中学校校友会、1906年12月23日

戦勝が生み出した観光（高）

表4 丁班：御吉野丸 7月25日～8月19日

府県又は学校名		人数	合計人数	団体監督者氏名 (団体数)	
東京府（小学校教員）		35	96	東京市浅草尋常高等学校伊藤房太郎；栃木県栃木中学校長劉須（1）	
神奈川県		5			
埼玉県●	学校名	人数			24
	師範学校	8			
	浦和中学校	3			
	熊谷中学校	3			
	川越中学校	3			
	小学校	6			
	附添医師	1			
千葉県	学校名	生徒数			教職員数
	女子師範学校	0	1		
	成東中学校	0	1		
	小学校	0	1		
栃木県●			29		
群馬県●			45	群馬県師範学校教諭武居芳成；静岡県農学校教諭白石保（1）	
静岡県●			58		
山梨県●			6		
茨城県●	学校名	生徒数	教職員数	80	茨城県師範学校校長濱口庄吉（1）
	師範学校	12	3		
	水戸中学校	16	1		
	土浦中学校	7	1		
	下妻中学校	3	1		
	太田中学校	2	1		
	龍ヶ崎中学校	5	1		
	農学校	4	1		
	商業学校	3	1		
	女子師範	0	1		
	小学校	0	14		
	第二部	0	1		
	附添医師	0	2		
	小計	52	28		
長野県●	85	135	220	220	長野県飯田中学校校長島地56；長野県上田中学校教諭藤澤直枝（2）
宮城県			31	144	宮城県立仙台第一中学校長川田正徳；山形県立山形中学校教諭安井留三（1）
仙台医学専門学校			1		
福島県			7		
岩手県●			39		
盛岡高等農林学校			10		
青森県			1		
山形県●	学校名	生徒数	教職員数	12	
	山形県立福岡中等学校	2	1		
北海道	学校名	生徒数	教職員数	16	
	師範学校	3	1		
	札幌中学校	3	1		
	小樽中学校	5	1		
	小樽区立小学校長	0	1		
	医師	0	1		
小計	11	5			
秋田県	学校名	生徒数	教職員数	27	
	秋田師範学校	21	3		
	県視学	0	1		
	小学校	0	2		
小計	21	6			

兵庫県●	学校名	生徒数	教職員数	121	121	姫路中学校校長平澤金之助（1）
	姫路師範学校	5	3			
	御影師範学校	0	1			
	姫路中学校	21	4			
	豊岡中学校	10	3			
	龍野中学校	0	1			
	工業学校	3	1			
	蚕業学校	4	1			
	商業学校	27	4			
	有馬農林学校	0	1			
小学校	0	32				
小計	70	51				
石川県			29	84	奈良県畝傍中学校校長宗像逸次郎；富山県高岡中学校長石橋多喜郎（1）	
奈良県			18			
和歌山県	学校名	生徒数	教職員数	18		
	和歌山師範	2	2			
	和歌山中学校	4	0			
	田辺中学校	9	1			
小計	15	3				
富山県●			19	102	三重県師範学校教員相澤栄次郎（1）	
学校名	生徒数	教職員数	88			
師範学校	6	25				
女子師範学校	0	1				
第一中学校	3	1				
第二中学校	8	2				
第四中学校	1	1				
商業学校	2	1				
農業学校	6	2				
商船学校	1	1				
小学校	0	25				
医師	1					
其他	2					
愛知県（小学校教員のみ）			14			
徳島県●			14	85	徳島県徳島中学校教諭倉塚源太郎；愛媛県師範学校教諭森岡格（1）	
学校名	人員(生徒+教職員)	71				
師範学校	3					
松山中学	7					
宇和島中学	7					
大洲中学	7 (5+2)					
西條中学	5					
今治中学	2					
農業学校	6					
松山商業	5					
八幡濱商業	9					
小学校	18					
合計			1041	(10)		

注：●印の付いているのは、医師が付き添っている府県である。

出典：『千葉教育雑誌』第172号、1906年8月15日、p.45；『茨城教育協会雑誌』第267号、1906年7月、p.39-40；『信濃教育会雑誌』第238号、1906年7月25日、p.33-34；『兵庫県教育会報』第204号、兵庫県教育会、1906年9月1日、p.25-26；『北海道教育雑誌』第163号、1906年8月25日、p.66；『愛媛教育雑誌』第230号、1906年8月20日、p.39；『校友会誌』第30号、秋田県師範学校々友会、1907年3月25日、p.17；1906年7月25日『大阪朝日新聞』；1906年7月21日『伊勢新聞』；1906年8月8日『埼玉新報』；1906年8月25日『埼玉新報』；岩手県立福岡高等学校百周年記念誌編集委員会編『福陵百年史 上巻』、岩手県立福岡高等学校百周年記念事業協賛会、2002年、p.21

表5 戊班：琴平丸 7月29日～8月22日

府県名		人数		備考
福岡県	学校名	生徒数	教職員数	78 西村（修猷館長） 監督
	福岡県師範学校	4	1	
	県立中学修猷館	7	2	
	県立豊津中学	2	1	
	県立中学明善校	6	1	
	県立中学伝習館	2	1	
	県立東筑中学	3	1	
	県立福岡農学校	5	1	
	県立嘉穂郡立嘉穂中学	5	1	
	県立福岡市立商業学校	6	1	
	久留米市立商業学校	4	1	
	小学校	0	23	
	長崎県	学校名	人数	
玖島学館		1（教諭）		
小学校教員		7		
佐賀県	学校名	人数		9
	佐賀県立師範	2（教諭）		
	小城中学校	1（教諭）		
	小学校教員	6		
大分県		67		和田教諭（大分師範）監督
宮崎県		39		二宮教諭（延岡中学）監督
熊本県	学校名	生徒	教職員	69 角田教諭（熊本師範）監督
	済々黌中学校	8	5	
	熊本師範学校	11	2	
	鹿本中学校	3	1	
	熊本農学校	9	2	
	熊本工学校	2	2	
	熊本商業学校	2	1	
	熊本八代中学校	3	2	
小学校	0	10		
鹿児島県		4		
沖縄県	学校名	生徒	教職員	5
	小学校教員	— 5		
山口県	学校名	人員(生徒+教職員)		48 安江教諭（山口中学）が山口、島根、鳥取三県の総監督
	山口師範学校	4		
	県立農業学校	5		
	山口中学校	3		
	岩国中学校	3		
	豊浦中学校	2		
	萩中学校	1		
	下関商業学校	10	1	
小計	39	9		
鳥取県	鳥取県立第二中学校など		8	
島根県	学校名	生徒数	教職員数	21
	第一中学校	6	2	
	第二中学校	3	1	
	農林学校	2	1	
	能義郡立農業職員	0	1	
	小学校教員	0	4	
	附添医	0	1	
小計	11	10		
高知県		57		
香川県	学校名	人数		48 師範学校の生徒と小学校教員の参加者なし
	丸亀中学校	34		
	大川中学校	3		
	工芸学校	5		
	商業学校	2		
農林学校	4			

岐阜県	学校名	生徒数	教職員数	94 伊藤徳定校長（師範学校）監督
	師範学校	5	2	
	岐阜中学校	21	2	
	大垣中学校	6	2	
	斐太中学校	6	1	
	東濃中学校	5	1	
	岐阜県農学校	7	1	
	岐阜商業学校	7	1	
	大垣商業学校	2	1	
	陶器学校	3	1	
	医師	0	4	
	小学校	0	16	
	小計	62	32	
新潟県	学校名	生徒数	教職員数	23
	長岡女子師範	0	1	
	高田師範	1	1	
	新潟商業	2	0	
	長岡中学	1	1	
	柏崎中学	3	2	
	高田中学	2	1	
	新潟師範	0	1	
小学校	0	7		
小計	9	14		
福井県		—		
大阪府		27		小学校校長23名 其他4名
名古屋高等工業学校		3		
合計		624		

注：—印の付いているのは不明である。

出典：1906年7月24日『福岡日日新聞』；『長崎県教育雑誌』第170号，長崎県教育会，1906年9月25日，p.35-37；山口県立山口農業高等学校百年史編纂委員会『山口県立山口農業高等学校百年史』，山口県立山口農業高等学校同窓会，1987年；『校友会誌』第20号，下関商業高等学校校友会，1906年12月，p.61（下関商業学校）；1906年7月24日『香川新報』；1906年7月20日『扶桑新聞』（岐阜）；1906年7月25日『東北日報』（新潟）；1906年7月24日，7月27日『山陰新聞』（島根）；1906年7月27日『大阪毎日新聞』（高知）；1906年7月29日『大阪毎日新聞』（沖縄）；1906年7月21日『琉球新報』（沖縄）；『岐阜県教育会雑誌』第144号，1906年9月30日，p.23（名古屋高等工業学校）；1906年7月25日，27日，28日『九州日日新聞』（熊本）；1906年8月14日『満洲日報』（熊本県立済々黌中学校）；1906年7月28日『大阪毎日新聞』（大阪）

注

- 1 日比谷焼討ち事件後，政府は直ちに都下に戒厳令と新聞紙取締の緊急勅令を発し，1905年11月29日まで撤廃しなかった。『東京朝日新聞』は同年12月1日の紙面に「新聞抑制記念」と題して，制裁を受けていた30数種の新聞雑誌の処分月日と停止日数を掲載し，政府の言論弾圧を批判した。
- 2 「ろせつ丸」の満韓巡遊の経緯については，有山輝雄『海外観光旅行の誕生』，吉川弘文館，2002年，1-88頁に詳しい。
- 3 博士論文『観光の政治学—戦前・戦後における日本人の「満洲」観光』東京大学大学院提出，2005年，42-57頁

- 4 長商創立七十五周年記念誌編集委員会『長商卒業生の生活と意見——母校の歩みに因んで』, 長商創立七十五周年記念事業協賛会, 1961年, 218-219頁
- 5 有賀長雄「旅順と修学旅行」, 『日露戦争実記』第75篇, 博文館, 1905年6月13日, 5-8頁
- 6 社説「教育家の旅順観覧（是非とも実行すべし）」, 1905年1月5日『読売新聞』
- 7 八木契三郎『学生必携修学旅行案内』, 博文館, 1905年8月, 670-678頁; 白幡洋三郎『旅行ノススメ』中央公論社（中公新書）, 1996年, 124-125頁
- 8 八申生「予想外」, 『学友会雑誌』第8号附録, 第七高等学校造士館学友会, 1907年2月25日, 49-50頁
- 9 岩崎行親「第七高等学校造士館の満韓修学旅行（明治三十九年）」, 『第七高等学校造士館二十五年・記念誌』, 1926年, 第七高等学校造士館記念祝賀会。旧制高校資料保存会『資料集成・旧制高等学校全書 第八巻 思想・社会編』所収, 旧制高校資料保存会, 1985年, 541頁
- 10 教育史編纂会『明治以降教育制度発達史 第五巻』, 教育資料調査会, 1939年, 7-8頁
- 11 白井生「満洲旅行日誌」, 『越佐教育雑誌』第166号, 越佐教育雑誌社, 1906年10月10日, 28-29頁
- 12 社説「満韓無賃渡航／学生界の福音＝陸軍省の美拳＝更に乗車賃をも免ぜよ」, 1906年6月29日『大阪毎日新聞』
- 13 「満洲修学旅行説」, 1906年6月12日『読売新聞』
- 14 「学生の満韓旅行」, 1906年6月28日『読売新聞』
- 15 社説「修学旅行の区域拡張（満韓及台湾へ）」, 1906年6月20日『読売新聞』
- 16 1906年7月1日『大阪朝日新聞』2面
- 17 「学生の満韓旅行」, 1906年6月30日『万朝報』
- 18 堀江月明「学生隊満韓行」（第1信）, 1906年7月25日『読売新聞』
- 19 游子「満韓に遊ばしめよ」, 『越佐教育雑誌』第163号, 越佐教育雑誌社, 1906年7月10日, 30頁
- 20 「満韓旅行（隣邦探険調査の必要）」, 1906年6月29日『信濃毎日新聞』
- 21 「満韓と小中学教員」, 1906年7月7日『東京朝日新聞』
- 22 「小学教員満韓旅行通牒」, 1906年7月8日『東北日報』
- 23 『学生夏期旅行案内』, 『探検世界』第1巻第3号附録, 成功雑誌社, 1906年7月5日, 82頁
- 24 「満洲行学生衛生費募集」, 1906年7月17日『中国』
- 25 1906年7月13日『時事新報』
- 26 1906年7月24日『埼玉新報』
- 27 1906年7月14日『岩手日報』
- 28 1906年7月18日『岐阜日日新聞』; 1906年7月24日『埼玉新報』
- 29 「はがき集」, 1906年7月26日『岐阜日日新聞』
- 30 「満韓旅行官船便乗は5名」, 1906年7月21日『琉球新報』
- 31 「満韓旅行日記」, 沖縄県立中学校編『球陽』第16号, 1907年9月5日, 48頁
- 32 「満韓視察解団式」, 1906年8月22日『信濃毎日新聞』
- 33 保田生「満洲旅行雑感」『秋田県教育雑誌』第183号, 秋田県教育会, 1906年12月25日, 18頁
- 34 壁陰生「珍旅行と其與へたる利益及教訓」, 『商海』第15号, 大阪高等商業学校々友会, 1906年9月30日, 1頁
- 35 「満洲旅行」, 『校友会雑誌』第42号, 東京開成中学校校友会, 1906年12月23日, 85頁
- 36 旅行団員「満韓旅行日記」, 『学習院輔仁会雑誌 満韓旅行記念号』, 1907年, 学習院輔仁会, 55頁
- 37 「満韓修学旅行者に警告す」, 『教育時論』第765号, 開発社, 1906年7月15日, 44頁
- 38 『学友会雑誌』第49号, 東京府第一中学校校友会, 発行年月未表記（1906年末から07年初頭と推定）, 34-35頁
- 39 宗像逸郎「学校生徒職員 満洲旅行所感」（下）〔筆者注:「中」の誤植〕, 『教育時論』第773号, 開発社, 1906年10月5日, 25頁
- 40 白井生「満洲旅行日誌」, 『越佐教育雑誌』第166号, 越佐教育雑誌社, 1906年10月10日, 30頁
- 41 堀江月明「学生隊 満韓行」（第2信）, 1906年7月27日『読売新聞』
- 42 北村重敬「回顧録」, 『創立三十周年記念誌』, 奈良女子師範学校, 1932年6月, 97-99頁
- 43 「東西南北」, 1906年7月31日『福岡日日新聞』
- 44 「文部次官ヨリ学校職員生徒満韓旅行ノ際ニ於ケル行動ニ関シ陸軍部内ノ視察報告内覧ノ件」, 東京帝国大学乾第555号, 明治39年10月2日, 『文部省及諸項往復 明治三十九年乙』第143-145号。なお, 文部省直轄の学校以外にも, 同じ文書は, 各道府県を通じて, 学校長宛に送られていた。『新潟県教育百年史・明治編』, 新潟県教育庁, 1970年, 714頁。渡部宗助「中等学校生徒の異文化体験——1906年（明治39）の『満韓大修学旅行』の分析」, 『国立教育研究所研究集録』第21号, 国立教育研究所, 1990年, 91頁
- 45 常陸盛治「満韓巡遊所感」, 『商海』第18号, 大阪高等商業学校々友会, 1907年2月18日, 4頁
- 46 白井生「満洲旅行日誌」, 『越佐教育雑誌』第166号, 越佐教育雑誌社, 1906年10月, 28頁
- 47 『満洲修学旅行記』, 東京府立第三中学校校友会, 1908年, 23頁, 31-52頁
- 48 白井生「満洲旅行日誌」（承前）, 『越佐教育雑誌』第167号, 越佐教育雑誌社, 1906年11月10日, 27頁
- 49 「附録・満韓紀行」『六稜』第28号, 大阪府立北野中学校校友会, 1907年3月, 23頁
- 50 『校友会誌』第30号附録, 秋田県師範学校々友会, 1907年3月25日, 107頁
- 51 井上謙三郎『大連市史』, 前掲書, 1936年, 15頁, 240頁, 293頁,

- 52 大江志乃夫『日露戦争の軍事史的研究』, 岩波書店, 1976年, 285頁
- 53 竹村民郎「公娼制度の定着と婦人救済運動」, 『環』第10号, 藤原書店, 2002年7月, 327頁
- 54 『滿韓修学旅行記念録』, 広島高等師範学校, 1907年, 英語部, 11頁
- 55 横山純一「学生団滿韓旅行」(第4信), 1906年8月17日『鎮西日報』
- 56 小出鈔「滿洲旅行記」, 1906年8月18日『扶桑新聞』
- 57 牧田寅之助「船中の記」, 『学友会雑誌』第49号, 東京府第一中学校学友会, 発行年未表記(1906年7月以後から1908年末までの発行と推定), 91-92頁
- 58 山田民治郎, 相川新次郎「滿韓旅行記」, 『長崎県教育雑誌』第171号, 長崎県教育会, 1906年10月25日, 34頁
- 59 『学友会雑誌』第5号, 東京府立第二中学校学友会, 1907年2月, 182-183頁, 傍点は原文のまま。
- 60 東京高等師範学校修学旅行団記録係『遼東修学旅行記』, 1907年, 153-154頁
- 61 『校友会誌』第160号, 第一高等学校校友会, 1906年10月, 34頁
- 62 尚旦「滿洲旅行雑記」, 『学友会雑誌』第49号, 東京府第一中学校学友会, 前掲誌, 85-87頁
- 63 森岡格「滿韓旅行の功價」, 『愛媛教育雑誌』第231号, 1906年9月25日, 3頁
- 64 『滿洲修学旅行記』, 東京府立第三中学校学友会, 1908年, 25-27頁
- 65 『師友』第46号, 北海師友会, 1906年12月, 84-85頁
- 66 『校友会誌』第20号, 下関商業学校校友会, 1906年12月, 61頁
- 67 「中学生の渡滿費」, 1907年7月7日『滿洲日報』; 「滿韓修学旅行」, 『教育界』第6卷第10号, 金港堂書籍株式会社, 1907年8月3日, 116頁
- 68 横川定「余が寄生虫学研究の五十週年回顧(一)」, 東京医事新誌局『東京医事新誌』第71卷第8号, 東京医事新誌局, 1954年8月, 58-59頁
- 69 「滿鮮地方修学旅行ニ関スル件」, 『明治期東京府文書 明治四十五年』, (東京都公文書館所蔵 630-A5-1), 1912年7月17日
- 70 1912年7月26日『滿洲日日新聞』
- 71 「中学生の渡滿費」, 1907年7月7日『滿洲日報』; 「滿韓修学旅行」, 『教育界』第6卷第10号, 金港堂書籍株式会社, 1907年8月3日, 116頁
- 72 『烏城』第42号, 岡山県立岡山中学校尚志会, 1906年9月, 7頁